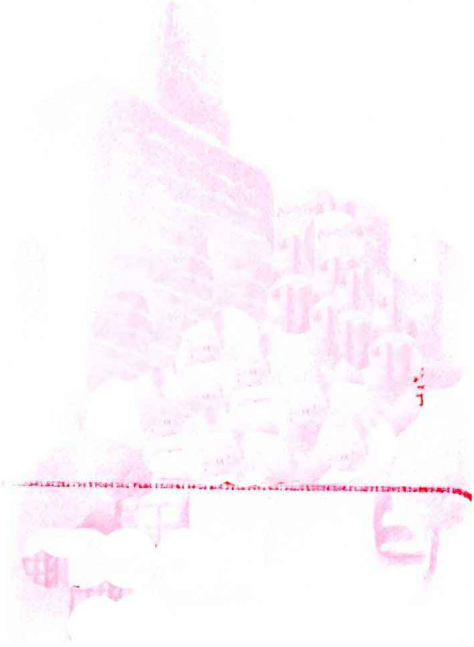
公園通りの猫たち

早坂 暁

公園通りの猫たち

早坂 暁



講談社

公園通りの猫たち

定価——九五〇円（本体価格九二二円）

一九八九年一二月一〇日第一刷発行

著者——早坂 暁

©Akira Hayasaka 1989 Printed in Japan

発行者——野間佐和子　発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二　郵便番号一一二—〇一　電話〇三—九四五—一一一一

印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——黒柳製本株式会社

ISBN4-06-204761-6

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

公園通りの猫たち●目次

眠らない街で……4
〝鴻池〟の猫……21
恍惚のアマテラス……36
ボスが替わる時Ⅰ……52
ボスが替わる時Ⅱ……68
巡査……86
旅の途中……102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

グリドン通信……118
スペイン坂で……133
天敵……148
巡査の涙……166
深大寺行き……182
一一九番の猫……197
夜からの挨拶……212

●装幀＝山岸義明
●写真＝奥村和泰／著者
●カバーイラスト＝川井輝雄

眠らない街で

私は、ほとんど眠ることのない街の、眠ることのない場所に住んでいる。

ほとんど眠らない街とは、東京渋谷の、通称公園通りと呼ばれる、たぶん今、日本で一番若者が集まってくる坂道のことである。

眠ることのない場所とは、本当は眠るための場所なのだと、ややこしい言い方になってしまうが、つまりはホテルのことである。眠るための場所ではあるが、二十四時間ドアが開いていて、ホテル自体は眠らない。私はそこの三階の一室に、最初は仕事場だったのだ

"眠らない街"は、夜ごと若者の好きな匂いを放つ

が、今は住居としてもう十年間も住んでいる。

今でこそ公園通りといっているが、以前はなんの名もない坂道であった。しかし、戦前となると、ちゃんと名前がある。

——練兵場通り。

ゆるやかな坂をのぼり切ったところに広く開けた練兵場があった。今の人たちには聞きなれない言葉だろうが、陸軍の訓練場のことである。兵隊たちが隊伍を組んで走るし、馬も走る。風の強い日は練兵場の原っぱから砂塵が巻いて、渋谷駅あたりまで黄色く煙ったようになった。練兵場通りの家々は、どんなにきちんと窓を閉めていても、隙き間から関東ローム質のこまかい砂が入ってきて、タンスの中までざらついたそうである。

練兵場の一隅には陸軍刑務所があって、さらにその一隅に処刑場もあった。二・二六事件に関与した軍人たちは、ここで銃殺され、

十一発の乾いた銃声が練兵場通りの坂道に響いてきたはずだ。

戦争が終って、練兵場から日本の兵隊たちは出て行ったけれど、かわってアメリカの兵隊たちが入ってきた。練兵場はワシントン・ハイツと名前がかえられ、カマボコ型の兵舎が並んで、英語の号令が聞えてきた。坂道には夜になるとGI相手の街娼たちが佇み、そのための〝連れこみホテル〟が坂道の奥に建った。今もその名残りのラブホテルが三つばかり残っている。

この坂道が劇的に変化するのは、東京オリンピックからである。ワシントン・ハイツの跡地に、オリンピックの屋内競技場が建った。そして、日比谷からNHKが引越してきて、ワシントン・ハイツ跡は代々木公園と呼ぶようになった。

さて舞台がととのったところへ、パルコがやってきた。

パルコはファッション店の集合体である。中に洒落た劇場も持っ

ていて、隣にある教会地下の小劇場ジアンジアンと並んで、この坂道に若者の好きな匂いを放ちはじめた。

坂道にあった変哲もないビルや、個人の家々が次々に姿をかえて、若者たちのファッションや食べものの店になっていく。

盛り場と住宅地の境界を、クリーニング店と米屋にみる人がいる。だいたい盛り場は駅から五、六百メートルの円内にあって、その境い目に必ず個人商店のクリーニング屋と米屋があるというのだ。

——そういわれて眺めてみると、私のホテルと公園通りをはさんで斜め前に、木造二階のクリーニング店があった。それは一家で働く、懐(なつか)しい風情の〝洗濯屋さん〟で、私は近くにある日本一大きいクリーニング店の白洋舎には行かず、看板も古ぼけた谷口洗濯店へ洋服を持って行った。入ってすぐの板の間で汗にまみれて重いアイロンを動かしている夫婦がおり、註文を受ける木のカウンターには

七十を越えるお婆さんが腰をのばして立っている。大きな声で註文しないと、ボタンを銀紙で包んでもらうのが伝わらなかったりする。

公園通りはすべてビルになり、木造で、個人営業で、夜もそこに家族が寝る店は、谷口洗濯店ただ一軒となった。思えばそれが練兵場通りの匂いを醱酵させている最後の家だったのだ。去年、お婆ちゃんが死んだ。そして今年になって、谷口洗濯店は姿を消し、八階の細長いビルとなった。お婆ちゃんが立っていたあたりに、英語の文字が散らばるジャケットを着たマヌカンが立っている。

こうして公園通りは完全に盛り場になった。広い、ゆるやかな坂道の両側から、家族が眠る個人の家は消滅したのである。

*

眠らない街といったけれど、公園通りは夜も三時近くまで若者たちが屯ろする。そんな深夜に集まってくるのは車のグループで、東

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

京の品川、練馬ナンバーのほかに、横浜、川崎、習志野（千葉）、所沢、そして群馬、たまには長野、静岡、山梨のナンバーが混じる。彼らのことを「四ク族」というのだそうだ。四輪駆動の車に乗っているからである。

たいていは若い男たちが複数で乗っており、大きくカーラジオをかけたりして、坂道をさまよっている女の子たちに声をかけるのだ。実際、漂流（さまよ）っているとしか思えない様子で、二十歳前後の、普通の女の子たちが坂道を登ったり、下ったりする。独りで歩いている女の子はいなくて、たいていは二人連れである。

「君たち、何をしている子なの？」

つい気になって声をかけてみると、たいていはＯＬとか、学生とか返事が返ってくる。学生といっても職業学校の学生たちで、地方から出てきて、寄宿舎やアパートに住んでいる。そうでなくては、

夜中の三時ごろまで漂流はできない。また、ＯＬというのが、レストランやパチンコ店に勤めている子までも含んでいる。

まるで坂道の灯が誘蛾灯であるかのように、車にのったり、赤いバッグを肩からさげたりしている、淋しがり屋の蛾が集まってくるのだ。

しかし、午前三時をすぎると、さすがの公園通りにも深いため息に似たような静寂が訪れる。ホテルのベッドの中の私や、公園通りのビルかげにダンボールを敷いて横たわっている浮浪者たちも、やっと深い眠りに落ちていくのだが、それもほんの一瞬のことである。

「コケコッコー！」

かすかに東の空が日の出を予感しはじめた頃に、鶏が鳴く。最初は驚いた。公園通りに鶏がいるとは思わないので、私は田舎の夢を見たのかと思った。

五十歳を過ぎてから、よく田舎の夢を見るようになった。母の夢にまじって、田舎で接した小動物たちが夢の主人公である。私は瀬戸内海の海辺の町に育ったので、小さな魚たち、そして家にいた犬や猫、鶏やウサギ。蜜蜂だって夢によく登場する。

裏庭に木箱をつくって、蜜蜂の一群を入れる。大きな女王蜂を中心にした働き蜂の集団である。分蜂期になると蜜蜂は日頃の秩序はどこへやら、一せいに巣箱を出てそこら中をパニック状に飛びまわるのである。家の畳の上は彼らがところきらわず羽を休めているものだから、うっかり踏みつけてしまいそうになる。

「あッ、ごめん!……」

瞬間にもう、足の裏に彼らの針が深く突き刺さっている。針を刺したら、死んでしまうというのに……。

海の底で紫色の液を吐く〝パイプ〟という動物がいる。ナマコに

似た不気味な色合いをした動物で、岩陰にまるで岩のカケラのように横たわっている。私たちがもぐって近づくと、濃い紫色の液を吐き出すのである。煙を吐くのに似ているので、私たちはパイプといっていたが、湘南地方ではウミウシというそうだ。どこか牛に似てるからだろう。俳優の渥美清さんは、ウミウシを見たとき、自分がもし海に生きる動物だったら、きっとウミウシになっているだろうと直感したそうである。

そのウミウシの海中に広がる紫の夢を見ることがある。

近ごろ腹部の手術をした時もそうだった。遠くに自分の名を呼ぶ声がして、麻酔から醒めていくのは、まるで深海から浮上していくのに似ているが、その時にウミウシの紫が広がった。

動物の夢をしきりに見るのは、生命(いのち)の夢を見るのと同じような気がする。五十歳をすぎ、生命にかかわるような病気に次々と罹(かか)って

からの、動物の夢である。癌(がん)といわれ、それも恢復(かいふく)のおぼつかないものと診断されてから、私は水族館へ行った。どこへでも好きなところへ外出してもいいと病院からの許可があって、私は水族館を選んだのだ。そして二度目は動物園へ行った。

動物たちを見ていると、ひどく心が休まった。なぜなのか、その時は判らなかった。

水中にほとんど動くことなく生きているタカアシガニ、わけもなく群れをなして水槽の中を回遊するアジたち、背をむけて寝そべっているオランウータン、まばたきをするフクロウ、檻(おり)の外に向って尿をとばすヒョウ……。

たぶん私は生命そのものを眺めに行ったのだろう。生命の消滅を宣告されて、無心な生命をつくづくと眺めたかったのだろう。

で、鶏の声を聞いた時も、てっきり田舎の夢だと思ったのである。

ところが目がはっきりしてきても鶏の声は本当に、すぐ近くでしている。

――公園通りに鶏が鳴くことがあるのだろうか。

私はホテルの窓を開けて、まだ大半は夜が占領している闇の中を、透かすように見た。鳴き声のするのはホテルのすぐ裏のあたりである。そこは小学校の小さな運動場である。都会の真ん中にある小学校の運動場は、薄緑色に塗り固められていて、まるでプールのように小さい。その一隅から鶏の声が聞えてくるのだ。

そうか、あれは小学校の子供たちが近頃飼いはじめた鶏なのである。これから本格的な眠りにつこうとする私には、少しばかり迷惑な鶏の声だが、朝を告げる生命が近くに住みはじめたことに祝福することにした。

夜明けは素早い。明けはじめると、東の方からあっという間に夜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb